

世代間交流による生涯学習

- 大学教養教育における対話型学習 -

大橋 眞

(徳島大学)

中恵真理子

(徳島大学大学院生)

光永雅子

(徳島大学大学院生)

斉藤隆仁

(徳島大学)

【要旨】

地域社会における知の継承は、伝統的に世代間交流により行われてきた。このような次世代に知を継承する仕組みは、世代を超えてお互いに学び合うという生涯学習の場として地域社会の教育的基盤を創ることに貢献してきた。地域の過疎化と高齢化が進むにつれて、このような知の継承の仕組みが失われつつある。大学の教養教育において、世代間交流により次世代に知を伝えと共にお互いに学び合う形の生涯学習を導入したところ、学生と生涯学習者共に学びのモチベーションとして有効に働くことが明らかになった。学生は、生涯学習者の後ろ姿から年令とは関係なく学ぶことの意義を感じ取り、生涯学習者は、次世代に知を継承できるという点が大きなモチベーションとなっていることがわかった。人の繋がりということの重要性に気づくことにより、地域社会の成り立ちを自然に学ぶ機会にもなっており、生涯学習社会の形成に果たす役割が期待される。

1. 背景

少子高齢化社会を迎えて、社会の知的基盤構築のために生涯学習社会の充実が課題となっている。また、持続可能な社会を築くために、次世代に伝統社会の知を継承する仕組みを整備する必要性も高まってきている^{1,2)}。その一方では、大学教育の学士課程の構築において、教養教育の重要性が再認識されてきており³⁾、これを学士課程にどのように位置付けて充実させていくのかが、大学教育改革の大きな課題となってきた。

平成20年度より、徳島大学の新しいスタイルの教養教育として、大学教育に関心の高い地域社会人を交えた授業が開講された⁴⁾。これらの授業では、講義室で地域社会人と学生が同時に授業を受けるような従来の講義形式の授業のスタイルとは異なり、学生、地域社会人、教員が同じテーブルについて、意見交換をしながら自らの意見をまとめる過程において、他の学習者からお互いに学び合うというスタイルを基本としている。社会人と学生が教員と共

に一つのテーブルを囲みながらあるテーマについて議論を重ねていくことで、学生のコミュニケーション力を育成することを目指してきた。このように地域社会人が果たす役割がこの取組の中で大きな意味を持っているために、社会人同士でこの取組の意義を確認する場を設けることが極めて重要になってくる。どのような場を設定することが、この問題解決のために有効であるかについて検証するために、幾つかの試みがなされてきた。地域社会人は、大学開放実践センターの募集要項に大学教育に対するボランティア的な内容として、社会人の役割を明記した各授業内容の紹介記事を掲載した。また、生涯学習者同士で、この取組の意義と社会人の役割を話し合う場を各学期の授業開始前に設定した。さらに授業が始まってからも、定期的に社会人同士の対話型の課外学習の時間を設けて、あるテーマについて議論をすることをおこなってきた。このような過程を通じて社会人は、学生と関わりながら学ぶことの意識が高まり、課外学習の学生を交えての学習会となることもあった。

地域社会人の役割は、それぞれの授業で異なっているが、グループディスカッションにおいて、地域社会人が学生と対話をする形式が最も多く、次いで体験型活動を通じて学生と交流するものや、コメンテーターとして授業の中で発言する形式がある。また、課外活動において地域社会人と学生が体験的に学び合うという学習形態もある⁵⁾。いずれの形式の授業においても地域社会人は授業の中で一定の役割があり、学生に対して一定の影響をもった存在になってきている。

2. 取組について

1. 世代間交流の形式で社会人が参画する教養科目

「名著講読、持続可能な社会を目指して」、「地域ボランティアリーダーと語ろう」
「パンセと絵画」「異文化交流から何を学ぶのか？」

2. 対話の主なテーマ

「大学で何を学ぶのか」
「仕事の流儀・プロフェッショナルとは」
「持続可能な社会とは」
「幸福な社会とは」
「死刑制度をどう考える」
「グローバル化とは何か」
「原子力発電をどう考えるのか」

3 世代間交流を採り入れた教養教育

3.1 生涯教育と学校教育

生涯教育に対する取組は、超高齢社会を迎えてその重要性が高まってきている。学校教育が教育の中心に位置付けられている現代社会においては、生涯教育においても教室において行われるような形が主流になってきている。学校教育は、体系的な教育を効率的に行うシステムが既に出ており、特に知識伝達型の教育などにおいては、効率的な教育システムである。ただし、思考力の育成や自主性の育成においては、未だに課題が多く残されている。生涯教育の目的から考えると、学校教育の知識伝達という面よりも、むしろ同じ教室に学ぶ仲間同士の連携によって、次の自主的な学びに繋がっていく面があり、人を結びつける場の提

供という意味を持ち合わせている。また、教員との人間的な繋がりがきっかけとなって、次の新たな学びに対するモチベーションに繋がる。生涯学習において知識を取り入れるという面に限定すると、今日では図書館や放送教材などの充実が進んでおり、内容の多様性や時間利用の効率の点からは、大学の生涯教育講座より優れている面もある。また、街中のカルチャーセンターにおいても、多様な生涯教育が行われるようになってきている⁶⁾。このような点から考えると、大学における生涯教育は、大学でおこなう意義を明確に説明出来るが必要になってきていると思われる。この点に関しては、生涯教育と大学教育との関連づけをおこなうことで、大学で実施されている生涯教育の意義を明確化することが考えられる⁷⁾。今日の大学教育の課題として、学生の主体的な学びをどのようにして実現していくのかということがある。生涯教育においては、教室に行くという段階で、すでに自主性を持ち合わせているという選択がなされている。そのために、生涯教育と大学教育の融合は、学生の自主性を引き出す効果が期待出来る。また、生涯学習者にとっては、世代を超えて共に学ぶというモチベーションを生かすという長所がある。このように正の循環により高まった生涯教育者のモチベーションを次世代の教育に生かすことで、大学における学生の課題を解決出来る可能性がある。この点を社会にフィードバックすることにより、生涯学習社会の基盤作りに貢献できるなど、大学での生涯教育の意義を明確に出来ると考えられる。

3.2 生涯学習社会構築における意義

生涯学習社会の充実のためには、社会人の自主的な学びの輪が、地域や世代を超えて広がって行くような伝播が起こって行くことが必要であると考えられる。一般的には知識伝授が中心の学校教育では、各自の自己実現を第一の目標として、モチベーションの高揚に利用する傾向が高い。これに対して、生涯学習においては、各自の自己実現よりも生涯学習者同士の人間関係をつくり出して、共に学ぶ仲間同士の社会形成という役割がモチベーションの高揚のために重要であろう。現在の主流を占めている知識伝達型の生涯教育や、体験を中心とした生涯学習においても、共に学ぶ生涯学習者同士の人間的な繋がりをつくることが、モチベーションとして重要な位置を占めている。

今回の取組は、そのような人から学ぶことの重要性を知るための場を提供するという意味をもっている。このような経験をすることにより、教養を学ぶということの意義についての理解も深まることが期待される。また、このような形で、教養を学ぶことに対する理解が社会に広がることにより、大学の学士課程構築において、教養教育の位置づけが明確になること³⁾に繋がっていくと思われる。

3.3 生涯教育と大学教育

生涯学習社会の充実は、少子高齢化を迎えた日本では、とりわけ大きな課題となってきた。これまでの伝統的な地域社会においては、様々な場面において世代を超えて知を継承する仕組みがあった⁸⁾。また、この知の継承の仕組み自体も、それぞれの地域社会において、世代を超えて継承されてきた。しかしながら、今日の日本では、地域社会の高齢化と過疎化に伴って、核家族以外の世帯数がこの20年でも20%以上減少してきており、この事実は世代を超えて知の継承をする仕組みが次第に失われつつあることを覗かせている⁹⁾。そのために、地域社会において、次世代に知の継承をするような生涯教育の仕組みを新たに構築すること

が必要になってきていると言えよう。また、次世代に向けての生涯学習社会の構築に対して、



図1 世代間交流による生涯学習と大学教育の融合

世間の関心を高めるための取組も必要となってきた。現在の大学に求められている社会貢献の中でも、生涯教育などの社会教育に対する貢献は、最も重要な課題の一つである。大学における生涯教育の取組は、これまで学士課程教育とは区別して考える傾向が強かった。とりわけ、積み上げ方式の要素強い分野の専門教育に携わる教員においては、その傾向が顕著であり、生涯教育に対する取組は、社会貢献という認識のもとに活動することが多かったと思われる。今日の大学教育の目標として、社会との関わりに対する視点を入れることが重要な課題になってきている。今回の取組のように、生涯学習者との学び合うという行為を通じての交流は、生涯教育の視点からも社会との関わりを考える機会となり、学生の生涯学習に対する新たな理解が生まれる可能性がある。両者を関連づけてカリキュラムを作製することにより、大学教育の充実が図られると共に、生涯教育に対する取組の充実が期待されよう。教養教育の位置づけは、大学教育の改革の中でも大きな課題である。このような専門教育と社会との関わりを明確化することにより、大学教育の改革も平行して行うことが出来る可能性がある。

3.4 対話型学習を主体とした生涯教育

対話をするという形の生涯学習を体験することにより、お互いに学び合うという人間関係が形成される。このような、学習者同士の繋がりが出来ることは、お互いにとってさらなる学習に対するモチベーションの高揚に繋がり得る。大学における生涯教育は、このような生涯学習者同士の繋がりを創り出す仕組みを学ぶ場として、体験的に学び合いの場を設定することが一つの有効な方法であろう。このような取組を通じて、生涯学習自体の意義を学ぶ場となり、教員自身も、自らの専門分野に関する知識伝達だけではなく、生涯教育に携わりながら、新たな学習法の開発などに取り組むことが可能となると思われる。

ただし、生涯学習者同士の連携を取ることや、お互いに学び合うという形式に馴染みがない場合には、その準備段階として、講義形式の時間を取りながら対話のための導入教育を採用入れることも、効果的な学習に導くために、検討する必要があると思われる⁸⁾。また、講

表1 参加した社会人に対するインタビュー結果（授業に対する意見）

社会人 A 社会人の発言が多すぎて学生さんがちょっと遠慮してしまうっていうのが、最後の授業でも言ったのですけれどもね。次は学生さんがもっと話してもらえるような雰囲気为社会人がつくんなきゃいかんかなというところが反省ですね。

社会人 B 創造的な議論でなしに、押し付け合うような議論っていうのが自分の中にあるなあ。だから、若い人が入ってくれて議論すると、もの凄く柔軟な意見があつて、僕はそういうのは勉強させてもらつて。どの科目もそうだけど、若い人の話を聞かせてもらつていて、ああ、と思う。楽しいね。

社会人 C 自分が生きてきた中で、こんなことやったよという。ほんとに僕が生きてきた社会はごく狭い範囲なのですよね。だからあんまり大きい事は言えないし、いろんなこと経験してきてないのだから何とも言えないのでしょうけど。自分の生きてきた中でこんなことやってきましたよ、と言うくらいでね。後は、いろんな人との、社会人の中でもいろんな分野の方が来られていますので、そういう人たちの発言の中で僕は勉強させてもらったというのが、正直なところです。

社会人 D 学生さん、それぞれ特徴持っていて、掘り起こせばなんぼでも出てきそうな人がいるってことを発見したのね。社会人の方なのですが、それを見えない人がいるってこと。逆に。それで学生の意見を聞けない、聞けないって言う人がいる。私も見えない時はそうだった。でもこれからは、同じことが起こってもね、社会人は両面から見る。例えば、学生側から見る、社会人側から見る。そしてお互いがね、出し合つて、何か掘んでいったらいいと思う。だから意見は違つていて良いと思っています

社会人 E これまで、一方的に聞くという授業が主体だったと思うのですが、こういうディスカッションしたり、グループで研究したり作品をつくつたりっていうのは、大学の一般教養としては、ほんとに受けたらいいと思います。こういう授業が一般教養で増えたらいいと思いますね。何かお手伝いできたらいいなと思っています。

社会人 F 私も初めてでしたが、とても斬新でしたね。私が受けたのはディスカッション形式の授業だったのですが、やっぱり生きてきた年数も違うし、知識の量も違うし、考え方も凄く違う。だからディスカッションするという面では、いろんな意見があるということで盛り上がったと思います。

社会人 G とにかく、“教養”って凄く大事ですよ。この年になって、ほんとに感じてます。だから大学の4年間、6年間の時期に、しっかり教養を身につけてほしいと思います。社会に出てから、人生の楽しさが全然違うと思うのですよ。それはものすごく声を大にして言いたい。それと、知識じゃなくて、知恵。知識は、また専門へ進んでも積むことはできると思うのです。

社会人 H 前期に受けた異文化交流が私にとって初めての徳島大学の授業だったのですが、いや～学生さんと受ける授業は新鮮で楽しかったですね。私は放送大学にも通っているのですが、ビデオを通して講義を受ける形式をとっているのでもうしても受け身の授業になってしまう。その点、様々な年代の人が集まりグループになって話し合う形式は私にたくさんの刺激を与えてくれます。

社会人 I 私は、生きている限り勉強し続けたいと思っています。今までいろんな分野に関わってきましたが、どこまでやっても終わりが無いのです。だからこそ楽しい！今生きている間にできるだけいろんな勉強をしていきたいと思っています。

義形式の生涯教育と対話形式の生涯教育を組み合わせたプログラムを開発することも必要であろう。このような形の生涯学習は、生涯学習者同士の繋がりを創り出す効果があり、とりわけお互いの生涯学習に対する考え方や、理解のレベルが近い場合には、有効な学習方法になり得る。

3.5 世代間交流における対話型学習

今日の大学教育において、教養教育の重要性が再認識されてきている。特に大学初年度の学生に対して、学ぶことの意義を再認識させるために、学ぶことは自己実現だけではなく、社会的な関係をつくることに対する意義があるという事実に対する気づきを持たせることが必要であると思われる。特に教養教育は、単なる教科書的な知識ではなく、人から学ぶという学習法を身につけること必要であろう。今回の取組は、そのような人から学ぶことの重要性を知るための場を提供するという意味を持っている。また、学び合うという行為の意義に関しても、モチベーションの高い生涯学習者と共に対話をしながら学び合うことにより、体験的に理解を促す効果を持っている（図1）。このような学び合いの場が、世代を超えた知の継承の場としての役割を果たしていることが、生涯学習者同士の繋がりとはい違った機能として理解されることにより、生涯学習者の学びに対する高いモチベーションに繋がっていくことが期待されよう。また、このような生涯学習者の高いモチベーションが、お互いのモチベーションを引き出すための正の循環を促すことに繋がり、教室内に生涯学習者と学生がお互いに学び合う場が形成されると思われる。このような場の存在が、本から学ぶことでは不可能な学習の場として機能することを明らかにすることにより、今回の取組のような世代を超えた対話型学習の学び合いの意義に対する理解が広まるとと思われる。特に生涯学習者と一般の学生との世代間交流により、お互いに学び合うことは、自らの知を次世代に伝えるという形の自身の社会での役割を再認識することになるために、生涯学習者の高いモチベーションに繋がることが期待される。実際に、このような世代間交流に携わった生涯学習者からは、世代を超えて知を伝えることの意義に関して肯定的に捉える意見が多く（表1）、継続的に取組むモチベーションが覗える。今後より多くの生涯学習者が、世代間交流による生涯学習へと発展するためには、同年代との対話型から世代を超えての対話型へと段階的に進んでいくような学習プログラムを用意することが必要であろう。

3.6 学生と地域社会人、教員がつくる学びのコミュニティ

現代の日本は、高度経済成長から定常型社会へ移行する転換期にあたり、これまでとは違った価値観で物事を判断することが必要になって来ている。このようにして、時代の変化に対処できるような、人間力の育成がまさに現代の社会の課題と言えよう。そのために、これまでの知識偏重の教育から脱却して、これからの社会の基盤を再構築するための創造性を育成するような教育を導入することが、大学に課された命題でもある。持続可能な社会のための定常型社会の構築に関しては、伝統的な社会において伝えられてきた知の中に定常型社会のための様々なアイデアが存在する。伝統的な社会の知は、知識だけではなく、知識をどう生かして地域社会で生きていくのかという知恵を、世代を超えて継承する仕組みであり、こ

表2 世代間交流による対話型授業を受講した学生の意見

学生A 確かに日常の機械的発達も医療技術の発達もこの世を便利にしてきた。しかしこれがわたしたちの欲をあげ、苦しめているかもしれない。本当に精神的に満たされるとはどういうことなのか？これを立ち止まって考えてみる必要がある。それを考えると旅においてもその経過において全く気づかなかったものに気づく感性の豊かさが出てくるだろう。(歯学部)

学生B この授業で学んだことは自分とは異なる物事の見方がたくさんあるということだ。環境問題や医療、死刑問題、など毎回グループでの話し合いを通して他の人の自分とは違った意見を聞くことができたのはもちろんだが、話し合うテーマが今までの見方と異なっていたように思われる。(薬学部)

学生C この 授業を受講して、私は専門の授業では学べないことをたくさん学ぶことができた。また、テーマによってはそのテーマについてあまりにも自分が無知なために意見につまることもあった。もう少しそのテーマについて知っていればもっと深く議論できたかもしれない。普段からもう少し社会問題に目を向けるように心がけようと思う きっかけとなった。また、マスコミで報じられていることや、今までの授業で習ってきたことが全て正しいとは限らないということも理解できた。(薬学部)。

学生D 正直なところ、まだこの問題をどうしたら解決できるのか私には思いつかないし、もししかし たらいま知っている情報もすべてが正しいとは限らないので、間違った考え方をしているのかもしれない。ただ、この授業を受けて思ったのは、こういった状況のとき に何が正しくて、何が正しくないのかを自分で考えるという姿勢が重要なのではないかとということです。(薬学部)

学生E 「幸福とは何か」について今回自分が発言した内容は「お金を持っていたら幸福。健康であつたら幸福。着たい服を着ていたら幸福。人それぞれ幸福とを感じることは違うだろう。しかしもっとも幸せを感じるまた感じなければならぬのは人とのつながりではないだろうか。両親、友人、恋人そういったものが大切であり、幸せとを感じるものではないか」というものだった。(総合科学部)

学生F 今回の講義で考えさせられたことは「幸福な国」と「幸福な人」とは大きく意味が変わってくることである。幸福な国を考えると自分が発言した内容では大まか過ぎ、議論の中でも出てきた福祉、社会保障の問題が絡んでくる。しかし、ブータンのようにお金がなくても我々は幸福であるといったように、幸福というものを追求し行き着く結果は自分が発言したようにもっとも簡単な人とのつながりであったり、人間味のように暖かい話になるのではないだろうか。(総合科学部)。

学生G 視野を広げる、専門知識を習得するなど、大学教育の意義として思いつく文句はいくつかある。それらは総じて、自分の得意とする分野あるいは興味関心の強い分野において社会に貢献できるよう力をつけることを最終的な目標としているはずだ。それならばまず、特定の分野において問題意識を持つことが肝要だと私は思う。軸となる意識がなければ、学業に打ち込む意義が見いだせない (総合科学部)。

学生H 世界的に見てみれば、日本は十分「幸福な国」と言えるはずだ。たとえば、日本には戦争がない。様々な選択の自由がある。経済的にも非常に豊かだ。なぜ、日本人は「不幸せ」と感じているのか。それは「Me i s m」のせいである。国民幸福指数で話題となったブータンでは、議論の末、国民が自分たちで「国の幸福」の道を決めたという。しかし日本人は、「国が助けてくれないから不幸せ」というばかりで、「どうすれば国が栄えるか、幸福になるか」という視点がない。「幸福な国」を作るには、まず我々国民が「Me i s m」を捨て、「国が幸せであつてこそ、国民は幸せである」という意識を持つことから始めなければならないのである (総合科学部)。

れまでは自然な形により、世代間交流による知の継承がおこなわれ、長年の間地域社会において受け継がれてきた。このような地域社会の知の継承の仕組みが失われつつある現代では、大学が中心となって伝統的な知の継承の仕組みを明らかにしていく必要がある。また、実践的な取組として、世代間交流による学び合いを実践することにより、地域社会の知の拠点としての大学の意義が高まることが期待される。このような世代を超えた対話型の生涯学習は、学ぶ事の意義とその方法論などを探究していくことで、これまでとは異なった視点から物事を考えてみる経験にもなる。このようにして、世代を超えての対話形式の授業により、お互いに異なった視点に気づくきっかけをつくり、新たな学びに対するモチベーションに繋げることが可能となろう。

3.7. 世代間交流における対話型学習の話題

世代を超えた対話型の生涯学習は、異なった視点からお互いの新しい気づきに繋がり、主体的な形で人から学ぶという生涯学習である。自らの知を次世代に伝えるという自身の社会での役割を再認識することになるために、高いモチベーションに繋がることを期待される。世代間交流による学びにおいて、適切な話題の選定はこのような学習形態においてはとりわけ重要になると思われる。生涯学習者にとっては、世代を超え伝えたい知として認識されているテーマであると共に、学生にとっても生涯学習者から聞いてみたい内容であることが必要である。今回の取組に関する授業で特に中心的に取り上げたのは「幸福な社会とは」「死刑制度をどう考える」「グローバル化とは何か」「原子力発電をどう考えるのか」などのテーマである。この授業を受講した学生にとって、とりわけ「幸福とは何か？」というテーマが印象に残ったことが覗える（表2）。この点に関して、その重要性に関する認識があるものの、これまで学生があまり考えたことがないテーマであることが考えられる。また、大学の教育の中でも、比較的取り上げられることの少ないテーマである。しかしながら、このテーマは、歴史的に見ても人類共通の永遠のテーマの一つであり、現代社会の学校教育においても、直接または間接的に教育目標になっていることが多い。そのために、地域社会人にとっても次世代に伝えるべき知として、高いモチベーションを引き出すことが出来るテーマである。このことが、今回の取組においても結果として、学生に対して生涯学習者と共通のテーマで学ぶことに対するモチベーションを引き出すことに繋がった面があると考えられる。

4. おわりに

大学において、これまで様々な生涯教育の取組が実施されてきた。しかしながら、その生涯教育を、一般学生の教育改革に生かす取組は、それほど多くはなかったと思われる。また、生涯学習者の側から見たときの、人の繋がりという観点に絞った生涯学習のモチベーションは、同年代の生涯学習者同士の人の繋がりをつくりたいという自己実現が主であったと思われる。これに対して、今回の取組の世代間交流による生涯学習では、人の繋がりからお互いに学び合う中で、主体的に次世代への知の継承に自身が関わるという自己完結ではない部分に主眼を置きながら、伝統社会の一員としての社会的役割を果たすことに対しての満足度を高めるという意義を持っている。このような世代を超えての知の継承の仕組みを大学教育に生かすことにより、新たな目的を持った生涯学習プログラムを作成できることがわかった。このような取組の成果から、どのようにして地域社会における生涯学習社会形成に貢献するために広がりをつくり出すことが出来るのか、今後の研究課題である。

引用文献

- 1) 矢野泉 多文化共生と生涯学習 明石書店 P70 2007
- 2) 末本誠、松田武雄 生涯学習と地域社会教育 春風社 P6 2004
- 3) 文部科学省 中央教育審議会答申, 新しい時代における教養教育のありかたについて、2002
- 4) 大橋 眞・中恵真理子・光永雅子・Steve T. Fukuda・斎藤隆仁・菊池 淳・香川順子・廣渡修一:大学教育改革と教養教育-地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて、大学教育研究ジャーナル 6: 88-97、2009
- 5) 大橋眞・中恵真理子・光永雅子・斎藤隆仁・廣渡修一:大学教育ボランティアを活用した教養教育 -地域に知の循環型社会の構築を目指す新しい形の生涯学習-、日本生涯教育学会年報 31:83-96、2010
- 6) 文部科学省 社会教育調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/index.htm 2012年6月25日参照
- 7) 光永 雅子・中恵 真理子・齊藤 隆仁・的場 一将・大橋 眞:自主的な学びを目指す「学びのコミュニティ」活動: 学生・社会人・教員で創る生涯学習の形、大学教育研究ジャーナル7: 102-109、2010
- 8) 佐藤忠男 学習権の論理 平凡社選書 1973年, pp.116
- 9) 総務省統計局統計調査部国勢統計課『国勢調査』: <http://www.stat.go.jp/data/nihon/zuhyou/n0200900.xls> 2012年6月25日参照